NY エッセイ ㉒

中瀬 有紀



Newport Bridge and Narragansett Bay in the state of Rhode Island

ものの見方

1972年に初刊が発行されたJohn Bergerの『Ways of Seeing（ものの見方）』の中に、“The way we see things is affected by what we know or what we believe.”（ものの見方は私たちの知識と信念に左右される）という一文があります。目の前に広がる「現実」という視覚的情報は脳によって言語化され、「わたし」という「にんげん」がどこにいて、なにをしているかを明確にします。このように想像は言語情報に依存するゆえ、芝居の舞台をデザインするには戯曲に使用されている言語の習得が不可欠です。

そもそも、舞台制作という共同作業において共通の言語は大変便利ですが、言語は人間が相互交信する際に用いられる信号としてだけでなく、その言語が生きる文化を負います。例えば、芝居の設定に「Summer/夏、Holiday/祝日、Day/昼間、House/一軒家、Family Party/家族の集まり」とあった場合、日本語の戯曲だとしても物語の舞台が東京と京都では同じデザインであるわけがなく、まして英語で書かれた戯曲でアメリカを舞台に話が進む場合、場面のデザインは日本のものと大きな差が予想されます。太陽光の世界共通認識が照明デザインにおける文化の壁を少し低くしてくれるとはいえ、アメリカの夏の祝日昼間に一軒家に集まった家族がどのように過ごすのかを知らなくて、どのように場面の光を想像するのでしょうか。これが言語と想像の隔たりです。

言語と想像の隔たりを越える方法は調査と体験です。しかし、その隔たりは経験値に比例するだけでなく、反比例することもあり、それは見ることと学ぶことを止めてしまった場合に起こりえます。毎日が未来への新しい一日であり、昨日の私よりも多くの言語を持つ今日の私には、目の前に広がる世界が昨日とは違って見え、今日デザインする光は昨日のものよりDramaturgically accurate（ドラマトゥルク的に正確）なはずです。

アメリカと日本の照明デザインが大きく異なって見えた私は、その差がなにに由来するのか、その答えを求めてアメリカ留学を決め、アメリカの照明デザインを学び体験してきました。この地で舞台の裏方仕事を覚えたことはアメリカの照明デザインを知る上で避けては通れない要でしたが、デザインに必要なことは照明技術や技法の習得だけでなく、この国の人々とその生活を知ることでした。これは舞台芸術が文化そのものである証拠です。